

2017年度 センター試験 国語（本試験） ワンポイント解説

第1問	問1	(ア)の正解で「旧に倍した」という言い回しがピンとこず、漢字が浮かばなかった受験生もいるかもしれないが、他の選択肢の漢字は浮かびやすいので、消去法で選択できたはずである。
	問2	傍線部と選択肢の照合が基本となる。選択肢がすべて「現代の科学は…ことで、～へと変化しているということ」と揃っている。傍線部に直接対応するのは、「～へと変化しているということ」の部分である。傍線部では「先進国の社会体制を維持する」と書かれているので、「社会体制の維持」の意味が説明されなければならない。「維持」の意味が説明されている選択肢は②・③・⑤だが、②「国家に奉仕し続ける」③「時代を継続させる」は、明らかにおかしい。また、傍線の直前の「現代の科学技術は、かつてのような思弁的、宇宙論的伝統に基づく自然哲学的性格を失い」の部分は、傍線部の3行あとの「現代の科学-技術では、自然の仕組みを解明し、宇宙を説明するという営みの比重が下がり」に対応している。各選択肢では、「現代の科学は」に続く部分はその説明となっているが、①「伝統的な自然哲学の一環としての知的な楽しみという性格を失い」、②「自然の仕組みを解明して宇宙を説明するという本来の目的から離れて」、③「『科学者』という職業的専門家による小規模な知識生産ではなくなり」、④「『もつと科学を』というスローガンが説得力を持っていた頃の地位を離れ」とあり、これらはすべてその説明としては適切ではない。⑤は「人間の知的活動という側面を薄れさせ」とあり、これが「～比重が下がり」の意味を適切に表している。
	問3	傍線部に「こうして」とあるので、前をまとめていることは明らかであるから、傍線部の前の内容と照合すればよい。各選択肢は「二十世紀前半までの科学は…、現代における技術と結びついた科学は～つつあること」と揃っている。チェックしやすいのは、「『科学が問題ではないか』という新たな意識が社会に生まれ始めている」という後半部である。「『科学が問題ではないか』という新たな意識」とは、傍線部2行前の「同時に、科学-技術の作り出した人工物が人類にさまざまな災いをもたらし始めてもいるのである」という部分を指していることは容易に読み取れる。その点を正しく説明しているのは、「人工物が各種の予想外の災いをもたらすこともあり」という④しかない。
	問4	傍線部「ゴレムのイメージに取り換えることを主張した」というのは、科学を「ゴレムのイメージ」で捉えるという主張である。ゴレムについては、 5 の段落で「人間が水と土から創り出した怪物で、魔術的力を備え、日々その力を増加させつつ成長する。人間の命令に従い、人間の代わりに仕事をし、外敵から守ってくれる。しかし、この怪物は不器用で危険な存在でもあり、適切に制御しなければ主人を破壊する威力を持っている」とあり、これは端的に言えば人間にプラスの影響を与えるが、その反面でマイナスの影響も与える両面性を持つ、ということである。その意味に注目して各選択肢の「現実の科学は～存在であると主張したということ」という部分をチェックする。①「人間の能力の限界を超えて発展し続け将来は人類を窮地に陥れる脅威となり得る」、⑤「適切な制御なしにはチェルノブイリ事故や狂牛病に象徴される事件を招き人類に災いをもたらす」は、ともにマイナスの要素しか説明していない。②「その成果を応用することが容易でない」は、事実に反する上、マイナス面の説明にもなっていない。④「神聖なものとして美化されるだけでなく」、科学を神聖なものとして捉えることになり、それを否定している傍線部の説明としては明らかにおかしい。③だけがプラス・マイナスの両面を適切に説明している。
	問5	理由説明問題であるが、何故かを考えるよりも、本文との照合を優先して解く方がよい。傍線部の「にもかかわらず、…問題がある」については、 12 段落でその点を説明し、 13 段落で「結局のところ」というかたちでまとめられている。したがって、傍線部に対応する表現は、「コリンズとピンチは科学者の一枚岩という『神話』を掘り崩すのに成功はしたが、その作業のために、『一枚岩の』一般市民という描像を前提にしてしまっている。一般市民は一枚岩的に『科学は一枚岩』だと信じている、と彼らは認定している」、「…一般市民も科学の『ほんとうの』姿を知らないという前提である」という部分である。そこから選択肢を判断すればよい。各選択肢に含まれる逆接以下に注目すると、この点を正しく説明しているのは④しかない。

	問 6	<p>(i)③「筆者が当時の状況を病理と捉えた」とあるが、当時の状況を病理と捉えたのはコリンズとピンチである。また、「二人の主張が極端な対処療法であると見なされていた」というのも、本文から読み取ることはできない。</p> <p>(ii)①「諸状況が科学者の高慢な認識を招いた」というのは、本文に合わない。</p>
第2問	問 1	<p>(ア)「呆っけに取られた」は、「意外のことに会って驚きあきれた」、「呆然となった」という意味である。①・②の選択肢にその意味が含まれているが、ここでは「熱心に眺めた」につながるので、①をとる。</p> <p>(イ)「生一本」は、「純粋で混じり気のないこと」という意味である。</p> <p>(ウ)「あてつけがましい」は、「いかにもあてつけるような態度であること」だが、「あてつける」とは「はっきりそれとわずに何かにかこつけて悪く言う」という意味で、「皮肉」の意である。</p>
	問 2	<p>傍線部は、直前の「それが可い。展覧会は込むだろうから朝早くに出掛けて、すんだら上野から何処か静かな田舎に行く事にしよう」を受けた部分である。「田舎に行く事」に触れている選択肢は④か⑤しかない。⑤は「子供も喜ぶだろう」という部分がおかしいし、「晴れやかな気持ちになった」も本文にはない。そもそも選択肢前半の「子供は退屈するのではないかとためらっていたところ」という部分も、本文にまったく一致しない。</p>
	問 3	<p>各選択肢が「思わずもらした微笑は、…に反応したものだが、」と形が揃っている。本文を見ると、傍線部の直前に「女中の肩を乗り出して眺め入ってる自分の子供を顧みると、我知らず微笑まれた」とある。②「小学生たちの踊る姿に驚く子供の様子」、③「子供の振る舞いのかわいらしさ」、④「幸せそうな子供の様子」は、いずれもそれに合わない。①と⑤にしぼられるが、①の「そこには病弱な自分がいつも心弱さから流す涙」が本文における涙の説明に反している。したがって、⑤が正解である。</p>
	問 4	<p>傍線部の「追懐に封じられてる」が説明されているかどうかをチェックする。「追懐」は過去を思い出している状態であり、それに「封じられてる」とは、その状態から抜け出せないことを意味している。それを説明しているのは、②「もの思いから抜け出すことができずにいる」しかない。それだけでも正解は決まるが、「追懐」の内容と選択肢を照合してみると、①「自分が、ささいなことにも心も動かされていた」、③「淑子さんと自分たちとの感情がすれ違ってしまった」「当時の未熟さ」、④「もうこの世にいない淑子さんの姿がかすんでしまっている」、⑤「淑子さんが自分たちに仕掛けたかわいらしい謎によって引き起こされた、さまざまな感情」はどれも明らかに一致しない。</p>
	問 5	<p>選択肢に説明された各場面の本文記述と照合すればよい。①「子供を見守り続ける直子の心情」「子育てに熱中する直子の母としての自覚」は、本文に説明されていない。②「ささいなことにも暗い影を見てしまう直子の不安な感情」は、本文からは読み取れない。③「直子には見慣れたものである秋の風物が、子供の新鮮な心の動きによって目新しいものになっている様」は、明らかに本文に一致しない。⑤「娘時代はもはや遠くなってしまったと嘆く様」も、本文には書かれておらず、読み取りようもない。</p>
	問 6	<p>④「直子の無知を指摘し、突き放そうとする表現」が、明らかにおかしい。⑤「穏やかな中にも生き生きとした姿」とあるが、「生き生きとした」というのは「活気がある・生きているような様」という意味であるため、「安らかに休息しているかのように見えた」の説明として不適切である。</p>

第3問	問1	(ア)の「にげなし」は接する機会が少ない単語かもしれないが、前後のつながりから見て③が正解だと判断できる。(イ)の「聞こえ」、(ウ)の「あやし」は、いずれも基本的な単語である。
	問2	助動詞の文法的意味に関する設問だが、よく見ると「ぬ」「ね」および「に」の識別が問われている。[a・e]は打消「ず」の連体形、[b]は断定「なり」の連用形、[c・d]は完了・強意「ぬ」の終止形および命令形である。
	問3	傍線部A「御心地」に尊敬の接頭語「御」が含まれていることから、これは「菊君」の「御心地」だとわかるので、選択肢を①・②に絞り込む。傍線部Aの直前には「いとあはれなる人を見つけるかな、尼ならずは、見ではえやむまじき」とあることから、ここで話題になっているのは選択肢①「二人の尼」ではなく、選択肢②「二十歳くらいの女性」だと判断できる。
	問4	菊君があえて「眠たげにもてない給う」た理由あるいは真意を問う問題である。傍線部Bの直前「君はかの御返しのとゆかしさに、あやくなる人しげさをわびしう思せば」を押さえれば、正解は②だとわかる。なお、②の「 <u>童を隣家へ遣わして、その帰りをひそかに待っていた</u> 」は、傍線部Bの次の行「 <u>からうじて童の帰り参りたれば、『いかにぞ』と問ひ給ふ</u> 」に対応している。
	問5	和歌の解釈では、和歌の詠み手と受け手、詠歌の背景や意図、和歌自体の大意やそこに含まれている心情、修辞法など複数の内容が組み合わされて問われることが多い。しかし、今年度は「和歌の大意」をつかむだけで、正解を導くことができ、例年よりも解答しやすい。和歌には和歌特有の表現があり、解釈と聞くだけで難しいと思ってしまう受験生もいるようだが、原文を自力で直訳するという基本的作業は和歌であろうが文章であろうが同じである。落ち着いて取り組んでほしい。選択肢について吟味すると、和歌Xについては和歌の中の語句の意味内容が、和歌Yについては大意が問われており、選択肢を一つずつ丁寧に吟味すれば正解は必ず得られる。和歌Xについては明らかに間違っている選択肢はないが、和歌Yは④の解釈のみが正解である。
	問6	登場人物の個々についての説明の適否を問う設問は初めて出題された。選択肢に問われている人物の行動や台詞の叙述を本文から正確に見出さなければならない。 選択肢①「童」については、第3段落に記載されている内容と完全に一致する。②「菊君」については「娘までも出家姿であることに驚いて」が第3段落の内容と異なっている。③「蔵人」については「不満を感じていた。」以降の記載内容が第3段落の内容に対して、ほぼすべて間違っている。④「老尼」については「その折、ちょっとした用事で」以降が、⑤「老尼の娘」については「高貴な身分から落ちぶれたことによって」以降が、それぞれ本文に記載されていない。 前書きにも明記されているように、本文の主人公は「菊君」であるため、「菊君」に関する設問は、問3・問4・問5(和歌Xの読み手)と、実に多い。このような場合は、選択肢①の「童」のような、主人公が事件を引き起こす上で、必要不可欠で重要な副人物に着目するのが、物語の事件性や主題を特に重んずるセンター試験ではよくあることである。物語の展開上重要な役割を担わされた人物の行動を受験生に追わせる例は、2015年本試『夢の通ひ路物語』の問5、2014年追試『うつほ物語』の問5、2013年本試『松陰中納言物語』問4など、いくつも類例がある。

第4問	問 1	<p>傍線部の語句の読み方を問う設問である。例年と異なり、(ア)(イ)とも漢文の重要語句である。(ア)は「けだし」と読んで「思うに、まさしく～」、(イ)は「いよいよ」と読んで「ますます」の意味になる。</p>
	問 2	<p>傍線部の文中での意味を問う設問であるが、例年と異なり、短い部分の解釈となっている。(1)も(2)も漢文の句形・句法や重要語句などが含まれていないため、本文の内容から考えなくてはならない。(1)(2)も傍線部前後と対句的表現となっており、ここに注目して考える。</p> <p>(1)「居于千載之下而求之于千載之上」とある。「千載」とは「長い年月」の意味である。「居于千載之下」とは「長い年月の流れの下流に居る＝現在」と解釈することができるので、「千載之上＝長い年月の流れの上流＝過去」と解釈できる。</p> <p>(2)「冠蓋之所集、舟車之所湊、実為天下之大都会也」とある。「冠蓋之所集(＝身分の高い人が集まる所)」と対となり「舟車之所湊」は「舟と車が集まる所」の意味、さらに「実為天下之大都会(＝実に天下の大都会である)」と続くので、「水(＝舟)陸(＝車)の交通の要衝」と解釈できる。</p>
	問 3	<p>傍線部の具体的内容を問う設問である。「如」は比喻を示すので、具体的に何を例えているか考える。「聽雷霆於百里之外者、如鼓盆」と「望江河於千里之間者、如縈帶」が対句的表現になっていることに注目する。「雷霆」「江河」は大きなもの、「鼓盆」「縈帶」は小さいものの例、さらに「百里」「千里」が距離が遠いことを示すので、「大きなものも遠く離れると小さく感じられる」の意味になる。</p>
	問 4	<p>筆者の考えの理由を問う設問である。問題文に本文に引用している故事に即して説明するように指示があるため、本文の内容および故事を説明している(注 3)に注目する。本文では「刻舟求劍」の直後から傍線部 B の直前までの「今之所求、非往者所失、而謂其刻在此、是所從墜也(＝今探し求めているものは、先に行った人がなくしたものではないけれども、劍を落とした時に刻んだ痕はここにあるので、ここから落ちたかと思っているのだ)」に注目し、(注 3)と合わせて考える。さらに第 2 段落の内容(＝問 6 で問われている)からも④が正解となる。</p>
	問 5	<p>返り点の付け方と書き下し文の組み合わせを問う設問は、傍線部に句形・句法・語法、重要語など解答のポイントになる語句があることが多い。選択肢を吟味すると、「為」と「未之聞」の「之」の読みがポイントとなっている。漢文の読みは意味を示すので、書き下し文を訳して文意が通るものを選ぶ。書き下し文を見ると、「為」は動詞「なす」、断定の助動詞「たり」、名詞「ため」と 3 通りに読まれているが、「其の地の名為(た)る(＝その地の名である)」と読まないで文意が通じない。直前の「為天下之大都会也」も参考になる。「未之聞」では「之」を動詞「ゆく」、指示代名詞「これ」と 2 通りの読み(＝解釈)がされているが、「これ」と読まないで文意が通じない。この 2 か所の読み方が合っている②が正解となる。</p>
	問 6	<p>傍線部 D の具体的説明問題に見えるが、実は本文の執筆意図を問う設問である。選択肢がほぼ同じ文構造になっているので、これを参考にして、本文で筆者の意見が述べられている箇所を探す。江戸の様子と著者の意見は第 2 段落に記されており、「後之於今」「今之於古」に注目すると①が正解となる。</p>